

# 第24号 華山会報

平成22年4月11日  
財団法人華山会

## 華山先生と井上竹逸

早稲田大学文学学術院准教授 成澤 勝嗣



世に「華山四天王」と呼ばれる人たちがいる。椿椿山を筆頭として、福田半香、山本葉谷、井上竹逸の四名のことをいうらしい。この中で、今や最も忘却の彼方に置かれているのが井上竹逸（一八一四～一八六六）であろう。ちょうど今、この人の日記類を読み進めているところだが、竹逸が華山を敬愛していた様子がよくわかる。

竹逸は、あの刃傷松の廊下事件のとき、浅野内匠頭を抱きとめた梶川氏という旗本の家来で、江戸の番町に住んでいた。華山がいる三宅坂の田原藩上屋敷からは、ほんのわずかな距離である。竹逸は十七歳の頃から華山のもとへ出入りし、やがて絵を教えてもらおうようになった。その頃竹逸が描いた山水図の習作に、華山先生が朱墨で添削を加えたものが、現在も井上家に残されている（写真）。図上に「予これを造る、華山先生この図に依じて直す、時に天保甲午（五年）一八三四の春正月なり」と漢文で記され、竹逸二十一歳、華山四十二歳の師弟関係を教えてくれる。

また、竹逸が維新後に綴った文章の中には、華山が絵について語った言葉も記録されている。それは「かつて華山先生に南宗画、北宗画という宗派のことを尋ねたところ、これは昔の人の画趣によって、南宗としたり北宗と名づけたりしているだけのことで、自分から称するようなことではないと言っていた。それでは先生の画趣はどうなのでしょうかと尋ねたところ、先生は笑っているばかりで答えてくれなかった」というような内容で、いかにも幅広い画法を描きこなしていた華山らしさがうかがえる。

華山が畜社の獄で逮捕されたせいからか、竹逸は一時絵を描く情熱を喪失してしまふ。そんな時期、長崎奉行田口加賀守のお供として長崎へ行き、高島秋帆が推進していた西洋式砲術を学んだ。これも華山の薫陶によるところがあったかもしれない。江戸へ戻った竹逸は、天保十二年（一八四一）五月、秋帆が幕閣のために徳丸原（現在の板橋区高島平）でおこなった西洋式砲術演習にも参加した。

翌年の十月二十七日、江戸にいた竹逸は華山自刃の報を聞く。日記に「田口公へ参り、行がけ二清水へ寄、華山先生当月十一日二自殺せし由承る二付、椿山へ寄、猶又聞し二て、当日、前日迄何の変も無之所、十一日申之刻二物置に而自殺の由、嗚呼哀乎」とあるように、竹逸は兄弟子の椿山を訪ねて華山最期の様子を知った。この頃すでに絵から離れていた竹逸だが、椿山との交友は続いていたのである。

幕府瓦解後、職を失った竹逸は、骨董を売ったり七弦琴を演奏したりしながら七十三歳の生涯を終えた。江戸から明治へという時代の変化に呑み込まれてしまった恰好だが、今も田原市博物館で彼の作品を見ることができ、きめるのは、せめてもの救いといつべきだろう。



田原市博物館 館内

# 郷土の歴史を学ぶ

田原市議会議長  
河合 照人

新学習指導要領の改訂が小学校では平成二十三年度に、中学校では二十四年度から全面实施されます。小学校で、英語の授業が始まることはよく話題になりますが、週1、2時間の授業増となるようです。既に当市の学校現場でも一部対応されていると思います。文部科学省によれば、今回の改訂では、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことができます。重要になってくる」とし、小学校社会科の改訂で重視されることは「児童生徒が社会的事象に関する基礎的・基本的な知識・概念や技能を確実に習得し、それらを活用する力や課題を探究する力を身に付けていくため

に、各学校段階の特質に応じて、習得すべき知識・概念や技能を明確にする」とともに、各種の資料を効果的に活用し、社会的事象の意味などを解釈したり事象の特色や事象間の関連を説明したりするなどの言語活動を重視している。さらには、我が国の国土や歴史に対する愛情をはぐくみ、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参加していく資質や能力を育成することを目指している。」とされています。

このような文を見ると、渡辺華山先生の「田原は武を構じ、徳を敷き天地の間に独立致掌大の地を百世に存候様御上夫第一也何にても徳に之無くては危し」が頭に浮かびます。これは、一八三八年に田原藩の家老たち

に書いた手紙の一節です。  
私が住む野田町も旧田原町時代の平成十四年三月に『野田史』を刊行し、平成の大合併直前までの地元元々の長い歴史を学ぶことができます。この本の内容は八章からなり、旧石器時代から一九五五年の昭和の大合併、平成までの野田の歴史を概観できる、資料的価値

も高いものです。図書館で閲覧することができません。文化財を研究し、学んだ多くの先輩たちが地域にいたおかげだとも思います。旧赤羽根町では田原市への合併後、『赤羽根の古文書』三巻が発刊され、庄屋文書が数多く收藏されることとなりました。渥美町が合併する際、多くの地区の地方文書が渥美郷土資料館に保管され、新市の財産が増えました。野田市民館に保管された多くの区有文書も『愛知県史』などの調査が進み、これからも散逸せずに活用されることは郷土の誇りです。これまでも三町の町史はもちろん、各校区や地区で郷土の歴史をまとめた書籍が発刊されています。田原市となり、現在は二十の校区があり、それぞれの地域に多くの歴史があります。それらが刊行されていない地域でも歴史は必ずあります。資料の収集や整理に時間がかかりますが、各地域で子どもさんやお孫さんとの共通の話題にもなると思います。地域の歴史を学び、子どもから親へ祖父母を含めた地域全体へという広がりがある地域からの地域の活性化につながることを祈ります。

## 目次

P	題字「華山会報」元華山会理事 故小澤耕一氏
P	華山先生と井上竹逸 成澤勝嗣
P	郷土の歴史を学ぶ 河合照人
	目次
P	画家渡辺華山の心象 『風竹之図』
P	渡辺華山『毛武遊記』 博物館収蔵品から
P	渡辺華山筆
P	『客坐掌記（天保九年）』
P	田原市博物館 渥美郷土資料館 企画展案内
P	華山の田原行（八）
P	研修視察 前編
P	財団法人華山会 田原市博物館 からご案内

# 画家渡辺華山の心象

田原市指定文化財 風竹之図

天保九年（一八三八） 絹本墨画

縦一一四・〇cm 横三九・三cm

田原市博物館蔵



風を受けてしなる竹の風情がよく表現され、華山が数多く描いた竹の図中でも傑出した作品である。賛に「便有好風来沈筆、更無閑夢到瀟湘。戊戌麦秋浣花後四日寫為湊長安先生華山渡邊登」とあり、江戸の蘭法医

であった湊長安（一七八六〜一八三八）のために描いたものである。印に白文長方印の「華山」と朱文方印の「渡邊登印」を捺している。長安は、名をはじめ義胤、のち重胤、通称を長安、号を丹晴堂または丹晴堂主人。奥州牡鹿郡湊村（現在の宮城県石巻市湊）に生まれ、江戸に出て、吉田長淑（一七七九〜一八二四）から蘭方内科を、大槻玄沢（一七五七〜一八二七）に蘭字を学んだ。また、文政五年（一八二二）長崎に遊学し、翌年出島に来たシーボルト（一七九六〜一八六六）にも学んでいる。文政八年に江戸に帰り、石町で開業し、

蘭方内科医として評判となり、家塾「丹晴堂」を開いた。天保七年（一八三六）には親友であり、同じく吉田長淑に蘭方内科を学んだ小関三英（一七八七〜一八三九）につづいて幕府天文方訳員となった。吉田長淑門下には、渡辺華山・高野長英・鈴木春山などもいた。賛にある沈筆は寝具のことで、「気持ちのよい風の中で寝ていると、夢をみる間もなく、瀟湘（中国湖南省洞庭湖南にある瀟水と湘水の合する地）にいるように気持ちよい」という意味であろうか。「麦秋」は、麦の穂が実り、収穫

を迎える初夏を指し、この作品が完成した天保九年六月九日に湊長安は没した。この年、華山は五月に田原藩校で使用するための孔子像や猛虎図、六月には芸妓図を描き、八月には、高久露厓の門人で、葛生（現在は栃木県佐野市）在住の豪農であった吉澤松堂（一七八九〜一八六六）にも「風竹図」を送っている。竹は文人画が好んで描いた代表的なモチーフで、写生を基としたものもあるが、画家としての写意を表現する手段であり、どのように竹を解釈しているかを理解できれば、贈られた人の人となり、精神や思想を表現したものととも考えられる。竹は高潔な生き方のたとえでもある。寄り添うように描かれた背の高い二本の竹は風を受けてしなり、周りに三本の小さな竹が描かれる。高い竹は、前後に存在することを表現するために濃淡が付けられている。もしやこの時期、長姉と二人の男の子に恵まれた華山夫婦を表現したのであるうか。

田原市博物館学芸員 鈴木利昌

渡辺華山『毛武遊記』①

研究会員 加藤克己

華山と旅

天保二年（一八三二）華山三十九歳の年は、華山にとって旅行の年であったと言ってもいいでしょう。九月二十日からの一週間ほどの相模旅行（これは、三宅友信の実母を厚木（神奈川県厚木市）の実家に訪ねるのが目的で、旅行記は『游相日記』としてまとめられました）から帰って二週間ほどすると、今度は毛武（群馬・栃木・埼玉県）地方への旅に出ました。

華山を論じる場合、その先進的な思考とそれゆえの悲劇、及び超一流の画家という二点が多く取り上げられますが、旅行記もまたすばらしいものです。行く先々で、鋭い観察眼によって人間や自然をいきいきと描写し、読む人を引きつけます。旅先で身分にこだわらないで、さまざまな階層の人々と積極的に交流して、その人々の発言を記録しています。華山と出会わなければ後世に全く知られることがなかったであろうに、たまたま華山と出会ったために記録が残された人物は、『游相日記』にも見られました。

華山は、二年前の文政十二年（一八二九）、藩主三宅康直から三宅家の家譜の撰集を命じられていました。また、天保二年五月四日には、この藩務のためには「他出勝手次第致スベシ」（『全樂堂日録』）という言葉を書いたとき、藩務を果たすために自由に旅行することができました。また、相模旅行に出かける二日前の九月十八日には、康直から先祖の旧跡を探して遊歴することと合わせて、その土地の地理・風俗・産物などを視察するように命じられていました。そのことを受けて出張旅行したのです。

天保二年、毛武への旅

華山は、高木梧庵と一人の下僕を連れて、十月十一日、三宅坂の家を出発しました。武蔵国三ヶ尻村（埼玉県熊谷市）で三宅家の関ヶ原合戦前後の旧跡の地誌や風俗を实地調査し、報告することが目的でした。そのついでに、妹茂登の嫁ぎ先である桐生（群馬県桐生市）の織物仲間岩本茂兵衛の家を訪ねてその一家と親しく歓談しています。

先に桐生へ向かい、出立の翌十二日に岩本家へ着き、永く滞在し、途中足利へ旅行したり、さまざまな人との交流をもちました。『客坐録』によって補いますと、十二月六日、桐生を出立し、翌七日、大麻生村（埼玉県熊谷市）の古沢家に落ち

着きました。そして、初めそこに逗留して、後に三ヶ尻村の龍泉寺に滞在して、三ヶ尻村及びその近辺の調査をしたものと思われます。そして、江戸へ帰ったのは十二月四日でした。華山の旅行としてはその生涯で最も長いものでした。

三ヶ尻の調査より先に桐生へ行ったのは、公より私を優先させたわけではありません。三ヶ尻を調査する手がかりをつかむ目的があったのです。そのために十月二十九日には、三ヶ尻への経路にあたる前小屋の地で開催された画会に出席を決めています。

桐生へ行く道筋ですが、華山は、板橋（東京都板橋区）で中山道へ出て熊谷（埼玉県熊谷市）まで進み、熊谷から北上して利根川を渡って太田（群馬県太田市）へ入り、そして桐生へと進みました。現在、東京から桐生へ公共交通機関を利用して行く場合は、東武鉄道伊勢崎線・桐生線を利用するのが普通ですから、華山の通った道よりかなり東を通ることになりますが、華山の通った道が最短距離に近いのです。

『毛武遊記』

この旅行の十月分が『毛武遊記』としてまとめられました。これには「上冊」とあります。ところが、『毛武遊記』と言いながら、その内容は



毛武遊記

天保辛卯十月十一日卯刻起、いつぞや浦賀鎮台渡辺甲斐守どの予があづけし行李、笈とをおくりこせし時、種々の品贈りて画をもとめられしに等閑にうち過たれば、山水の図つくりてそれをむくひ、また其家来なる一木平蔵のために扇に画つくりて其もとめに応ず。家廟を拝す。祖母君母君に御いとまを乞ふ。諸士来り別をおしむ。白甫句をおくる。

華山先生上毛の行あり、十月十一日翁の初めたびねといへるおもひ出で、

歩行初お留守といふハなかるべし

天保二年（一八三二）十月十一日、卯の刻（午前六時）に起きる。いつであったか、浦賀鎮台（相模国の港町、神奈川県横須賀市。江戸湾口を押さえる位置にあり、幕府は浦賀奉行を置き、江戸防衛に当たさせた）渡辺甲斐守どの（浦賀奉行。四一〇〇石。名は輝綱。小川町堀留に住む）が、私の預けた行李、笈とを送り返された時、種々の品を私に贈って画を求められたのだが、等閑にうち過ぎていたので、山水の図を作つてそれを報い、またその家来である一木平蔵（華山の門人、号翠涯）のために扇に画を作つてその求めに応じる。家の廟を拝む。祖母君（華山の祖母おりん）母君（華山の母栄）にお暇を願う。さまざまな人が来て別れを惜しむ。白甫（田原藩士鈴木喜六）が句を贈る。

華山先生の上野国（群馬県）行きがある。十月十一日、翁の初めての旅寝といったのを思い出して、旅行の初めお留守ということはないはずでしょう。

太白堂を訪ひ、毛武諸人への手簡を乞ひ、これを道引とし行んとするなり。又小林蓮堂を訪ひ、蕪村がゑがきしおくの細道の摸本数紙遣す。これは橋助惣がたのミにてかくハせしなり。此日は雨ぞふる。板橋二いたる。この頃岩本茂兵衛こもの吉兵衛といふもの、江戸に出であきなひす。板橋に飲し、逢んと約す。きたらず。出づ。志朱七十式文出し魚を買ひ、土産とす。あいなめ、車ゑび、きす。飲飯の料式百五十式文。志村といふ所に出づ。

太白堂（江口孤月。俳諧の宗匠、江戸青山に住む）を訪れ、毛武（群馬・栃木・埼玉）のいろいろな人への手紙を乞い、これを道引として行こうとするのである。又、小林蓮堂（華山の友人）を訪れ、（与謝）蕪村が描いた奥の細道の摸本を数枚遣わす。これは橋助惣（江戸麹町の菓子商助惣の主人）の頼みによってこのようにしたのである。この日は雨が降る。板橋（武蔵国豊島郡、中山道の宿駅、東京都板橋区板橋）に至る。この頃、岩本茂兵衛（二代目茂兵衛。堤村の百姓谷仲右衛門の子。桐生新町の織物買次商岩本家の養嗣子となり、華山の妹茂登を娶る）の使用人である吉兵衛という者が、江戸に出て商売をしている。板橋で飲み、逢おうと約束していたが、吉兵衛が来ないので、出る。一朱七十二文を出して魚を買って、土産とする。飲

食の代金は二百五十二文。志村（武蔵国豊島郡、中山道の宿駅、板橋区志村）という所に出る。

たばこの火からむと、先行人に追ひ付て物がたれば、こは惣髪といふ頭にて、眉毛薄く鼻すじ通り面長く色黒く、かたに包みを負たるもの、ふなり。身のたけは予にひとしく大きやかなる男、神世の学をむねとし平田篤種（胤）ぬしの学び子となりて、其家に在しとぞ。万の事ひがに見て我神の世の事ぞすぐはしき道なるを捨て、から国のねじけたる道を学ぶなど心得ぬよし。抑此おのこは館（館）林侯の家臣なりしが、故ありて仕をいたし、生田万とよびて、江都あか坂田まちといふ所のみとせばかり住しが、心のま、ならぬとて上野州太田といえるかたにする人ありて妻は館林にさきへやりておのれひとりちざりし方にいたれるなり。太田に住めるこ、ろ二なりてよめるとて、

志良登保布乎尔比多山乃もる山の山守りとしも我やなりにき

タバコの火を借りようと、先を行く人に追いついて話をする、これは惣髪という頭であつて、眉毛は薄く、鼻筋は通つていて、面長で色黒く、肩に包みを負つた武士である。身長は私と同じく大きな男、神代の時代を研究する国学を主として、平田篤胤殿の弟子となつて、その家に住んでいるという。あらゆることを偏つて見て、わが神の世の事こそまっすぐな道であつたのを捨てて、中国の間違った道（儒教）を学ぶことなど納得できな

いという。そもそもこの男は、館林侯（上野国館林藩主松平右近将監武厚）の家来であったが、訳があつて官職を辞して、生田万と称して、江戸赤坂田町（東京都港区赤坂）という所に三年ばかり住んでいたが、思うようにならないと言つて、上野州太田（上野国新田郡、例幣使街道太田宿、群馬県太田市太田）という所に知る人があつて、妻は館林へ先によつて自分ひとり約束した方に至つたのである。太田に住んでいる気持ちになつて詠んだと言つて、

しらとほふ小新田山（太田市の市街地の北にある金山）の守る山の山守に私はなつてしまつたのか。

※ **物髪** 月代を剃らず、髪を全体に伸ばし、頭頂で束ねたもの。束ねずに後ろへなでつけて垂らしたのもいふ。江戸時代、医者・儒者・山伏などが多く結つた。

※ **しらとほふ** 枕詞。語義、かかり方は未詳。小新田山にかかる。「しらと」は「あらと」と合わせて使う砥石の一種で、それを産出する意から言うか。『万葉集』巻十四―三四三六に「志良登保布小新田山の守る山の末（うら）枯れせなな常葉にもがも」がある。

余後至岩本聞生田氏事。生田万父作左衛門、館林侯世臣、善讀書性剛毅方正、頗有人望。子万亦讀書善字、兼長国歌。侯嘗求言、万上書論政、其言以凌上放逐。

父亦祿削官奪、岩本氏母嘗游浴押山、邂逅左衛門于逆旅、以為人懇朴往來、帰途延到家留二日、因知始末。

私は後に岩本茂兵衛の家に至つて生田氏のことを聞いた。生田万の父作左衛門は、館林侯の家臣でよく書物を読んで、性格は剛毅方正で、たいへん人望があつた。子の万もまた書物を読み、字もよく書いた。かねて国の歌に優れていて、館林侯はかつて意見を求めた。万は意見を書いて提出し、政治を論じた。その言うところは、上をおそれないため、放逐された。父もまた俸禄を減らされ、役職を召し上げられた。岩本氏の母（崋山の妹茂登の姑幸）は、かつて押山（上野国山田郡二渡村の忍山鉱泉、桐生市梅田町）に遊浴した。作左衛門と旅館で思いがけなく出会つた。人となりが懇朴であるので、行き来があつた。帰り道、家に寄つて二日泊まつた。それで事情を知つた。

万云、上州寺井村、寺尾大炊介義重古趾、近土人堀地得石室、中納三十二道、兜一、有笹リンドウ標織（識）、又刀一口、長三尺二寸、洪甚。蓋以高田侯支封上之、侯亦謹加補修十襲下村保獲（護）。

万は言う。上州寺井村（上野国新田郡、太田市寺

井）は、寺尾大炊介義重（新田義重）の古城跡である。近くの人が地を掘ると石室が出た。中に三十二個の道具を納めていた。兜一つは笹竜胆の標識があつた。また、刀一口、長さ三尺二寸（約九十七センチメートル）、さびが甚だしい。しかるに、高田侯（下野国佐野へ栃木県佐野市）藩主堀田正敦かの飛び地であるため、これに召し上げられた。高田侯はまた、謹んで補修を加えて、大切に包んで、村に保護した。

※ **寺尾大炊介義重** 『吾妻鏡』によれば、治承四年（一一八〇）新田義重は、初め源頼朝に従わず、源義家の孫であることをもつて自立の志を抱き寺尾城に籠つたが、まもなく頼朝に従つたという。その寺尾城は、上野国片岡郡寺尾村（高崎市寺尾町）とするのが有力であるが、新田郡寺井とする言い伝えもある。

※ **笹竜胆** 正しくは村上源氏の定紋であるが、清和源氏のものという俗説がある。新田氏も清和源氏である。

※ **高田侯** 堀田正敦（一七五八―一八三二）は、下野国佐野藩主となる前、近江国堅田藩主であった。正敦の経歴を聞くうちに、「堅田」を「高田」と聞き誤つたらしい。

※ **十襲** いくえにも包んで大切にしまつておくこと。

（続）

田原市博物館収蔵品から

渡辺崋山筆『客坐掌記(天保九年)』②



(図  
風景)

(図  
風景)



(図  
風景)

(図  
風景)





(圖 風景)

(圖 風景)

擬江貫\*  
道 無名

**江貫道** 江參 宋、字貫道、江南人、一作衢(浙江衢縣)人、曾被召至臨安、有旨館於府治、山水師董源、巨然、而豪放過之、常居雲川、深得湖天平遠曠蕩之景。(中・236)

**無名** 池大雅(七三〇~七六〇)、池野氏、名勤、耕、無名、字公敏、号大雅堂、霞樵、九霞山樵、三岳道者、京都銀座中村氏の下没池野嘉左衛門の男、妻は池玉蘭、柳沢淇園、祇園南海に教えをうけ、詩情豊かな文人画を生み出した、日本文人画の祖、代表作「山亭雅会図」「樓閣山水図」、与謝蕪村との合作「十使十宜図」など。(国書人名① 100)



野人自愛山中

宿、

況是葛洪丹井

西、

庭前有箇長松

樹、

夜半子規來松

啼

維禎\*

**野人自愛山中宿、……**  
顧況 唐、字通翁、号華陽真逸、蘇州(江蘇蘇州)人、一作海鹽(浙江海鹽)人、至德二載(七五七)進士、為著作郎、性談諧、常以詩戲侮權貴、人多嫉之、工真、行書、能詩、善画山水、師於王墨(作王洽)而秀潤過之、尤工小筆、任職半年、落筆有奇趣、後隱茅山、以壽終、著画評、篇有集二卷、卒年九十。(中・1537)

**葛洪**(二八四~三六三)、字雅川、丹陽句容(江蘇句容)人、爵闕内侯、咸和初遷諮議參軍、求為句漏令、少好学、家貧伐薪以質紙筆、夜輒寫書誦習、所書「天台之觀」飛白、為大學之冠、古今第一、著要用字苑。(中・1212)

**維禎** 楊維禎(一二九六~一三三七〇)、字廉夫、号鉄崖、会稽(浙江省紹興)人、泰定四年(二三二七)進士、江西儒學提舉、行草書雖未合格、然自清勁可喜、矯傑橫發、称其為人。(中・1196)



**湘簾** 湘竹の（斑竹の異称）で織った竹むしろ。  
**高槐** えんじゅ、マメ科の落葉高木。

**清颺** 清い風、涼しい風  
**夏夕** 「紹述先生文集」卷之二十八 七言絶句に所収。（近世家文集集成④ 743）  
**乙巳歳** 享保十年（七二五）  
**東屋** 伊藤東涯（一六七〇～一七三六）、名長胤、字源蔵（元蔵）、号東涯、慥慥斎、諡号紹述先生、伊藤仁斎の長男、博学多識、父仁斎につき漢学を修め、その跡を嗣いで家塾古義堂を守り、仕官せず、父の学問を祖述することに務めた、文章を善くし、儒学史・中国語学・制度などに関する著者がある。（国書人名① 166）

湘簾平鋪坐 小斎、 蟬声和月在 高槐、 閑来植箇数 竿竹、 收取清颺涼 滿懷 右夏夕 乙巳歳 東屋書 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	湘簾平鋪坐 小斎、 蟬声和月在 高槐、 閑来植箇数 竿竹、 收取清颺涼 滿懷 右夏夕 乙巳歳 東屋書 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
---	---



**柯九思**（一一九〇～一三四三）、字敬仲、号丹丘生、天台（浙江省）人、特授学士院鑒書博士、善鑑識金石、博学能詩文、善書、間作山水、筆墨蒼秀、丘壑不凡、亦善墨花。（中・600）

**三鈔** 密教で煩惱を破る象徴として用いる法具、古代インドの武器を型どつたもので、両端が三つのまたに分かれている。  
**真教**（一二三七～一三一九）、法諱真教、号他阿弥陀仏、時宗一代遊行上人、建治三年（一二七七）一遍に出会い門人となる、相模当麻に無量光寺を開創した。（国書人名② 561）  
**飛行三鈔記** 仁海筆の書名、唐にいた空海が師の惠果和尚から密教の法具を授かり、帰国に際して三鈔を取り出し投げ、それが飛んで十年後高野山の松に掛かり、この地に真言密教の道場を建てたという故事による。  
**建長五年癸丑** 一二五三年  
 （続）

三鈔百事寺僧連署也 種々御沙汰之蜜々 恐々謹言 七月三日 沙夜真教* 飛行三鈔記 建長五年癸丑十一月十六日仏子真教記	柯九思 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
---	---

田原市博物館から  
渥美郷土資料館へ  
ご案内

五月十五日(土)～七月四日(日)

春の企画展 田原・渥美2会場開催

田原の美術 杉浦正美展

— 幻想と創造の世界 —

杉浦正美は、昭和元(一九二六)年豊橋市に生まれ、昭和五年五歳の時に母を亡くしました。昭和九年、家庭の事情により祖母のいる福江町折立(現在の田原市折立町)の叔父の家で、弟と祖母とともに貧しいが心休まる幸せな日々を過ごし、その後、名古屋で暮らすこととなりました。

昭和二十七年、北川民次、安藤幹衛に師事し、工場労働者を描き二科展に初入選した後は、二科展を中心に様々な展覧会に出品を続けるほか個展を数多く開催しています。近年では、母子像や寓話と神話をイメージした作品を多く発表し、それら作品の制作背景には渥美時

代に深く心に刻まれた様々な体験がモチーフとなっています。

今回の企画展では、現在も二科会監事として活躍される先生の渥美への想いの込められた作品の数々を展示紹介し、その画業を振り返ります。



「なす畑の母子」一九九九年

七月十日(土)～八月二十二日(日)  
夏の企画展

杉浦明平の世界

「みんぺーさんの記憶と魅力」

杉浦明平は、大正二年(一九一三)、愛知県渥美郡清田村(現田原市古田町)に生まれ、旧制豊橋中学を経て一高、東京大学国文科に進み、卒業後、イタリア・ルネサンス研究のため、イタリア語を習得、翻訳・編

集の仕事に携わりました。戦後、郷里に戻り、渥美町議会議員を二期務めます。その間の体験を元にした新スタイルの記録文学が評判になり、注目を集めました。その後、畑仕事にいそしみながら、郷土の渡辺崋山をはじめとした江戸時代の文人を取り上げた小説や評論、食べ物エッセイなどの多分野で活躍しました。残された手紙や原稿、発刊された本などを通し、文学・評論・エッセイなどで、人間社会を見極めた「みんぺーさん」の回顧展を開催します。



書斎の杉浦明平氏  
一九九七年 水谷積男氏撮影

八月二十八日(土)～十月十七日(日)

秋の企画展

挿絵画家 宮川春汀展

宮川春汀(明治六(一八七三)年～大正三(一九一四)年)は、渥美郡畠村(現田原市福江町)に生まれました。

明治二十三年、幼少の頃より得意とした画業を志し上京、当時挿絵界で活躍していた富岡永洗の門下に加わり、挿絵や錦絵、風俗画の世界にその才能をふるいました。

また、柳田國男や田山花袋、島崎藤村などといった文人たちとの交友も広く、この春汀により柳田や田山も伊呂湖を訪れています。

今回の企画展では、春汀の作品や文人たちとの交流を示す資料を展示します。



「小供風俗」宮川春汀画 一八九七年

# 華山の田原行（八）

## 二月九日

「前宵におなじ」とあるので、執中論の執筆の続きをしたと思われます。午後は、八木八右衛門、平山忠左衛門、萱生松山を訪ねます。

松山の養父・双松から今回の旅の目的である「御系譜の御用」について情報を得ます。双松の話では、八代藩主康之の時（一七五五―一七八〇）、古い書き付けを焼いてしまったことがあったそうです。その時、八木泰順が書いた家中系図がたいへん詳しく書かれていたので、八右衛門の家に密かにひきとっておいたということです。間瀬氏が断絶した家筋を調べた時この系図があったということです。さらに、竜門寺（田原町新町）が写した長興寺（大久保町）の年代記を借りてあるというので見たところ、証拠となるが大変多かったです。その時に、一色家に伝わっている寛文年中の御祐筆方の呈書案文があり、興味深く見たことも記されています。



全楽堂日録

華山の画家としての評判は国元にまで届いたようので、この日に、西光寺（神戸町新美）が絵の弟子になったという記述があります。

この日は、萱生源左衛門、二村吉太夫、萱生双松と小酌し、華山は先に寝ます。午前〇時頃目が覚め、吉田藤一郎へ出す書状を書いたようです。

## 十日

日付があるだけで、何も記載がありません。

四日（本稿五）の所にも記載がありませんでしたが、この時は、すぐ隣に五日と書いて書き出してありますが、十日の所には、四、五行空欄を空け、十一日を書き出しています。後日書こうと思つて、こうしたのでしょうか？

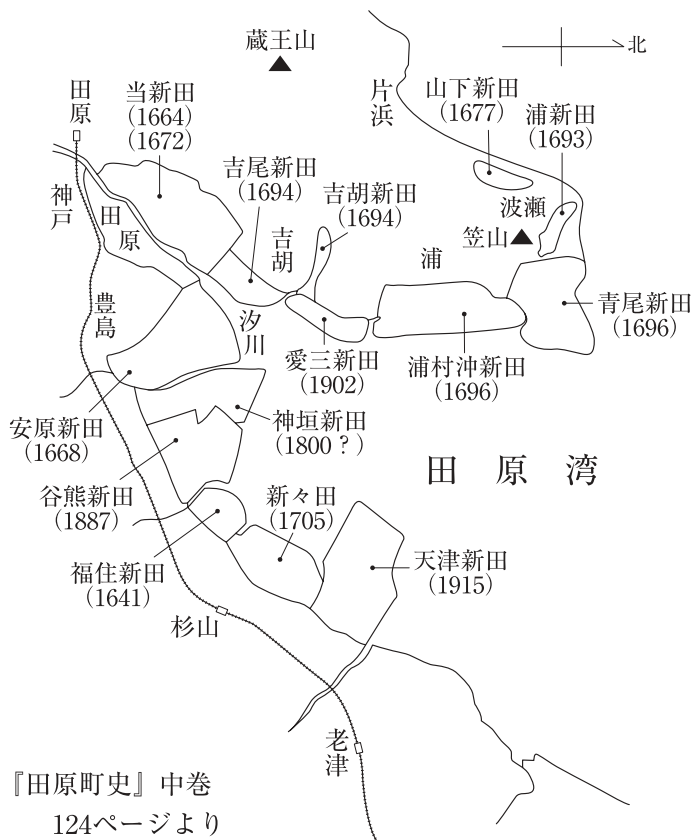
## 十一日

この日は、平山喜太郎を訪ねます。喜太郎の父・志右衛門は、身分不相応な借金をし、藩主に命じられ、江戸から田原への転居を命じられます。今年七十余になる母は、江戸に産んだ子どもをたくさん残してきたので、華山からその便りを聞くとうと待ちわびていたようです。この母の思いなのか華山の思いなのか、華山は田原を「このよはなれる地」と記しています。喜太郎の母は、華山が訪れると、何も言えずに涙に咽んでしまいます。華山は、鯛、烏賊、こがねをおくったようです。

次に、松岡部（『全楽堂記伝』を著した松岡次郎）・生田何右衛門・大島祐左衛門を訪ねます。ここで、現浦町の青尾新田の開発計画の話をお聞きします。

田原藩は一万二千石のため、江戸時代の二百六十余の藩の中で、石高の少なさでは下から数えた方が早い藩でした。しかし、江戸城内では、中位

田原沿岸新田開発図



『田原町史』中巻  
124ページより

の待遇である帝鑑の間詰が許されていきました。その待遇維持や藩士の多さのため、藩政は非常に苦しいものとなっていきました。そこで、増収のために、新田開発が盛んに行われていきました。『田原町史』(中巻、一二三ページ)によると、寛文から享保までに、新田の約九十%以上が開発され、それ以降は急激に停滞していたようです。ここに出来た青尾新田は、元禄九年(一六九六)に開発された十二町歩の田です。

の真木十郎兵衛(重郎兵衛の父)も稲熊空右衛門も承認しません。どうしようかと思っていたところ、家老の村松六郎左衛門(百度の父)の家に出入りしている農夫がいたので、この農夫を通して六郎左衛門に申し出たところ、簡単に承認してくれ、改めて開発の命令が下りました。まず、拡張工事のために波をとめ、干拓をしなければなりません。そこで、藩の御用をする時の定めだったようで、人夫一人に米一升の手当てで、干拓の工事を始めます。工事は難航したようで、

十石あった青尾新田の生産力が落ちてきたので、村奉行の祐左衛門が、浜方手代の奥田新六とも

この手当てのために、新六と祐左衛門の借りた金がおよそ二千両に及んだようです。

名古屋の和兵衛というものがいて、この工事のことを聞き、開発してできた田を買い取ろうと申し出ます。祐左衛門たちは工事に疲れていたので、話し合いの結果、和兵衛をもとじめとします。しかし、波を堰き止めても堰き止めても、それを打ち破って波が浸入してくるのを見て、和兵衛は新田の買取をあきらめます。

祐左衛門たちが再び工事に取り掛かると、今度は、尾張藩の役所から、尾張藩の付家老・竹越山城守正定の依頼ということで、和兵衛が諦めた工事を購うという申し出がありました。そこで、尾張藩が、工事の指揮をとるようになりました。

こうして施工主がかわるうちに月日がたち、それとともに波の憂いもなくなりました。そこで、尾張藩から現西尾市尾花町の吉左衛門というものに二千六百両で売ったようです。干拓地には堤を築いたので、今年からもとじめた枕を高くして寝ることができるようになったということです。

このほかには、前回紹介した永田清五郎のことが記されています。

(続)  
研究会員 柴田雅芳

平成二十一年度華山・史学研究会研修視察  
 四州真景―佐原 銚子の旅 前編

平成二十一年度華山・史学研究会研修視察は、十一月十四、十五日、一泊二日で行われました。今回は、華山の房総旅行記とも言える四州真景（重要文化財）にちなみ、千葉県香取市（旧佐原市）と銚子市を訪ねるものでした。

当日、午前八時三十分 豊橋駅に集合した会員は、加藤克己、柴田雅芳、鈴木利員、木村洋介、中神昌秀の五名で、いっになく少数でした。豊橋駅を新幹線で出発しましたが、窓の外は風雨が強く、車中で相談の上、初日と二日目の日程を入れ替え、初日は佐原へ行くことにしました。品川で総武線に乗り換え、千葉経由で十二時三十分頃佐原へ到着しました。

駅前で昼食を済ませ、ホテルへ荷物を置き、まずタクシーで香取神宮へ向かいました。雨はいつのまにか止んでいました。約十分で神宮の参道正面の大鳥居に着くと、運転手が、もっと近くまで行きますと言って、総門のすぐ下まで行ってくれました。そして、今通ったのが、旧参道ですと説明してくれました。この旧参道こそが、十二年前に香取神宮を訪れた時は、準備不足や現地での滞

在時間の不足のせいもあり、わからずに終わってしまっていたものでした。運転手の一言で、謎が解けたような思いでした。

ここで、なぜ

旧参道を探していたかについて簡単に紹介をします。四州真景の中に、大鳥居を描いた絵があり、無題ですが、従来「鹿島根本寺」と呼ばれていて、鹿島を描いたものだと考えられていました。しかし、関東博物館協会刊

行の『利根川流域の自然と文化』の中に「華山の房総への旅」（前川公秀、竹内鈴恵）という論文があり、この絵が、香取神宮境内から鳥居越しに旧参道を見たものであるとして、文化十一年（一八一四）の久保木竹窓の「香取詣記」の図を引用して、四州真景とその図の建物配置の類似性から香取説を根拠付けていました。また『渡辺華山



優しい旅びと』（芳賀徹）にも「香取神宮境内から鳥居越しに香取神宮寺を望んだものと考えられる端正な一図がある。これを私は、はじめ鹿島神宮境内から見た根本寺と考えたが、千葉県立美術館久保木良氏によればそうではないとのこと」という記述があります。この香取説とも言つべき説を、ぜひ自分の目で確かめたいと思っていたためです。

今回、旧参道の位置が判明したため、総門から西方向に向いて華山が描いたと思われる構図を自分の目で確認することができました。現在の旧参道は、華山が絵に描いた三重塔や建物だけでなく、鳥居もありません。華山の絵に描かれた石灯笼に似た形の灯笼が何基もあったので、年代を確認したところすべて明治以降のものでした。唯一の手懸かりは絵の中で鳥居の下に横に延びる線です。この線は境内とその下の参道の段差を表現したものだと言われています。現在も大きな段差が残り、絵にはありませんが、石の階段があります。もう一度絵と今の風景を比べて見ると、確かにこの位置から描いたものであると思われました。

次に浜鳥居と呼ばれる、利根川の川の中に建つ鳥居へ向かいました。鳥居は、堤防下の河川敷にありました。晩秋の雨上がりということもあり、堤防の上は冷たい風が吹き、利根川の水も濁って

いました。さて、この鳥居は、江戸時代、木下茶船（木下、現在の千葉県印西市から利根川を下った乗合船）と呼ばれた船を使って、三社詣（香取神宮、鹿島神宮、息栖神社）をすることが流行していましたが、その際、香取神宮へ参拝するのに利用した参拝用船着場とも言うべき所です。津宮という地名も残っています。四州真景に絵はありませんが、「可亥刻達津宮投佐原屋」という文章が残っています。華山が津宮河岸に午後十時に到着し、佐原屋という宿屋に泊まったことがわかります。安政二年（一八五五）に刊行された『利根川図誌』（利根川流域の地誌）に「津宮河岸」の図があります。そこには、コの字型の船着場の上に鳥居が建っており、その先に参道が続ぎ、両側には宿屋らしい建物と出入りする大勢の人が描かれています。佐原屋は不明ですが、この宿屋の一つに泊まったものと思われます。

また、四州真景には、さらに続いて「久保木太良右衛門ヲ訪」（久保木清淵、前述の久保木竹窓と同一人物）という文章があります。清淵は漢学者で、久保木家は下総国香取郡津宮村の名主でした。その生家跡が津宮に現存するということを博物館の木村主事が事前に調べてくれたので、行って見ることにしました。しかし、タクシーの運転手が無線で聞いてもわかりません。利根川の

堤防の上からそれらしい家を探すと、土蔵のある旧家らしい家が見えます。近づいてみると長屋門があり、ここかなと思いましたが、表札がありません。近所の人に聞こうとしましたが、周囲は農村然とした場所で人家も少なく、人はまったく見当たりません。違うかもしれないと思い、もう少し探すことにし、利根川沿いを走る国道三五六号線まで出てみました。車の通行量は多いのですが、人影はなく、聞くことはできません。国道を少し歩くと、また立派な門がある家があり、表札を見ると久保木となっています。確認はできませんでしたが、今度こそ間違いのないであろうということになりました。（後日、久保木清淵の生家の地番情報が入手でき、グーグルマップで検索した結果、当日探した家ではなく、浜鳥居から約百メートルの位置であることが確認できました。）

その後、タクシーで佐原市内まで戻り、徒歩で伊能忠敬関係の史跡を訪ねました。忠敬は、江戸時代後期に、日本最初の実測精密地図を作ったことで有名です。伊能家は香取郡佐原村の名主で、醸造業を営んでいました。現在も店舗と母屋からなる旧宅が残っています。一通り見学した後、伊能忠敬記念館へ行きました。入館すると、まず伊能図の代表的な地図である大図（縮尺1/36,000）、中図（1/216,000）、小図

（1/432,000）のレプリカが展示されていました。次に、伊能図の下図である、基点から各村への方位だけが書かれた図面、距離だけが書かれた図面、山々だけが鳥瞰的に描かれた図面等がありました。これらにより、製作過程がよくわかりました。その奥には木製の測量用具である象限儀（天体観測用）、量程車（距離測定用）等の展示もありました。これらの伊能忠敬関係資料二千三百四十五点は一括で重要文化財に指定されています。

そこから、さらにまちを散策がてら、忠敬の銅像を見学し、ホテルへ戻りました。夜は銚子外川漁港から毎日仕入れるという料理屋で金目鯛等の新鮮な魚料理を堪能しました。



財団法人華山会から  
田原市博物館  
ご案内

企画展のご案内

五月十五日(土)～七月四日(日)

春の企画展 田原の美術

杉浦正美展―幻想と創造の世界―  
(企画展示室一・二・渥美郷土資料館)  
名古屋に暮らし、渥美を心の故郷として現在も活躍する二科会監事で洋画家の杉浦正美の六十年にもおよぶ画業を振り返ります。ギャラリートーク(作家による)

五月二十二日(土)・六月十二日(土) いずれも午前十一時から

同時開催：愛知県美術館所蔵作品による 北川民次展(企画展示室二)

杉浦の師である北川民次の作品を展示します。

創建二百年田原藩校成章館関係資料(特別展示室)

重要文化財孔十哲像などを展示

七月十日(土)～八月二十二日(日)

夏の企画展 杉浦明平の世界「みんべーさん」の記憶と魅力

(企画展示室一・二)  
同時開催：渡辺華山を知る

(特別展示室)  
展示解説 会期中二回開催予定

八月二十八日(土)～十月十七日(日)

秋の企画展 挿絵画家 宮川春汀展

畠村(現在の田原市福江町)出身で挿絵画家として活躍した宮川春汀の作品や明治の文豪たちとの交流を示す資料を展示します。展示解説

九月四日(土)・十月二日(土) いずれも午前十一時から

同時開催：愛知県美術館所蔵作品による 川瀬巴水展(企画展示室二)

昭和の広重と称される版画家川瀬巴水の作品を展示します。

渡辺華山と小華(特別展示室)

平常展のご案内

～五月九日(日)

華椿系の花鳥画

華山や椿椿山は弟子たちに多くの花鳥画を指導しています。

新収蔵品見せます

寄贈・寄託された美術・歴史資料などを初公開します。

田原の歴史―自由民権運動に参加した人々

村松愛蔵と川澄徳次らは一八八四年愛知・長野の自由党員が起した反政府転覆未遂事件「飯田事件」に関与しました。

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

春の企画展 一般四〇〇円 (三二〇円)

夏・秋の企画展 一般六〇〇円 (四八〇円)

企画展開催時は小・中学生無料

平常時 一般 二二〇円(一六〇円)

小・中学生 一〇〇円(八〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金

休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室  
毎月第四土曜日研究会  
視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館  
展示会・催し物のお知らせ  
見学会に参加できます。  
博物館だより(年3回)・華山会報  
をお送りします。

華山会報 第二十四号

平成二十二年四月十一日発行  
編集発行 財団法人華山会  
理事長 白井孝市  
事務局長 彦坂善弘  
〒四四一―三四二二  
愛知県田原市田原町巴江二二の一  
TEL〇五三一・二二一・一七〇〇  
FAX〇五三一・二二一・三七七〇

編集・協力  
田原市博物館  
華山・史学研究会  
会長 渡辺巨祥

吉川利明 林 和彦  
山田哲夫 別所興一  
林 哲志 中村正子  
小川金一 柴田雅芳  
加藤克己 中神昌秀  
増山禎之 磯部奈三子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 平成二十二年十月二日